

石狩市浜益区小規模集落における社会調査

— 世帯インタビュー調査から得られた知見 —

橋 本 伸 也 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科)

伊 井 義 人 (藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科)

岸 知 子 (藤女子大学 人間生活学部 食物栄養学科)

今 野 邦 彦 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

今日、急速に進行する高齢化に加えて、種々の生活インフラの脆弱化などが複合して新たな限界集落問題が顕在化しつつある。本学の花川校舎が立地する石狩市においても、海岸沿いや山間部に点在する小規模集落の急速な限界集落化が進行している。しかし、石狩市が過去2回実施した調査結果においては「困っていることが特にない」と住民は回答している。この実状を探り、暮らし振りを把握するために、石狩市役所と藤女子大学が2016年9月に共同調査を行った。具体的には浜益区において10世帯以下の小規模集落6箇所30世帯を訪ねてインタビュー調査を実施した。半構造化インタビューにより、調査対象と家族、日常生活、交流、集落の魅力、集落の将来、などに関して聴取した。その結果から、①世帯の状況、②日常生活の状況、③家族の状況と交流、④近隣の状況と交流、⑤他の交流、⑥今後の生活・集落とのつながり、⑦行事・懐かしい事、集落への愛着、などの分析を通じて“生活振り”の一面を捉えることを試みた。

キーワード：浜益区、小規模集落、世帯インタビュー、生活、高齢過疎

1. はじめに～調査の経緯

都市部の繁栄の影で過疎化の問題が指摘されて久しい。近年は限界集落という表現も定着した感がある。今日、急速に進行する高齢化に加えて、高齢単身世帯や高齢夫婦世帯の急増といった世帯構造の変化、コミュニティ機能の希薄化、地域の人口減少にともなう種々の生活インフラの脆弱化などが複合して新たな限界集落問題が顕在化しつつある。とりわけ、地方においては、高齢者にニーズの高まる保健・福祉・医療の提供体制の確保や、生活インフラの脆弱化対策をどのように進めるかは住民ひとり一人の生活に関わり、究極、死活問題にもつながる緊喫の行政課題となっている。

本学の花川校舎が立地する石狩市においても、平成17年の旧石狩市、厚田村、浜益村との1市2村の合併当初から、海岸沿いや山間部に点在する小規模集落の急速な“限界集落化”を危惧し、行政ニーズとして捉えられてきた。

かたや東北大震災の復興施策においては防災面から移転集住が誘導され、限界集落対策に通じる見方もなされているが、しかし個人の生活の変転を政策的に求めることは容易ではない。本研究は、本学が立地する周辺地域の小規模集落に焦点をあてて、住民にインタビューし、そこでの生活を生の声で捉えようとするものである。直接的に行政ニーズへの政策的な反映を意図するものではなく、また、問題点を見いだそうとするものでもなく、小規模集落での“生活振り”の一面を捉えることで、可能であれば行政サービスの方向性の検討に寄与できないかと考えた。

石狩市浜益区の小規模集落を対象とした社会調査はこれまで2度実施されている。それらはいずれも世帯調査をベースにしながらも、質問紙での調査であった。

平成21年4月実施の「小規模集落生活実態調査報告書」では、「交通手段」と「除雪サービス」の確保、相互扶助の精神を維持するためにも「自治会組織の強化・支援」が課題とされながら、「困っていることは特にない」との回答も多く、調査実施・分析者側の戸惑

いも随所に見られる¹⁾。

平成 24 年 3 月実施の「高齢者生活支援対策に関する要望調査報告書」(聞き取り調査)では、ここでも「交通が不便」というニーズ、自治会が管理している「水道施設」の老朽化も指摘している。特に後者は、水道というインフラの老朽化という問題だけではなく、自治会という人的インフラの高齢化という課題の顕在化と解釈できよう。また、この調査でも「困っていることが特にない」と回答した世帯が一定数あることが調査結果では指摘されている。まさに報告書でも述べられている「将来の不安は感じているものの、多少の不便さは甘受しており、生まれ育った地域での生活を楽しんでいる世帯が多い」「都市部への移転を考えている世帯はない。長年住み慣れた地区への強い愛着」と結論付けるのも当然といえよう²⁾。

これら二つの調査は、石狩市浜益支所が実施した“行政調査”である。つまりは、調査対象者とも周知の関係であり、各世帯が抱える課題も、日常的なやり取りの中から想定できる間柄である。本研究は、そのようないわば浜益区の「専門家」が実施した調査を「補足」するような形で、「ヨソ者」である藤女子大学が“生活振り”にアプローチする社会調査の実施を企図したものである。

2. 調査の目的と概要

平成 20 年以降、2 度の調査結果は網羅的な調査であり、そこで浮かび上がってきた以上の課題は容易に導き出すことはできない。そこで、二つの調査結果を踏まえた上で、以下の点を今回の調査の主目的とした。

第一に、日常生活における「交流」の実態を明らかにする点である。今回対象とした集落はいずれも小規模である。また、高齢者も多いことから、家族・親族や近隣住民を含め、どのような人たちと日常的に交流を持ち、頼りにしているかを知りたいと考えた。

第二に、地域に対する愛着をより具体的な表現として語ってもらいたいという点である。結論を先取りすることになるが、調査対象者は集落の将来に対して肯定的な見解、つまり明るい未来を語ってはくれなかった。しかし、調査前から、集落に活気があった時代のどのような側面に地元の方々は愛着を有しているのかを知りたいと考えていた。また、その過去へのまなざしが、将来への希望につながるヒントを導き出してくれるのではないとも考えていたのである。

以上、これらの二つの視点を明らかにすることにより、過去 2 回の調査結果において「困っていることが特にない」と回答している理由をより深く分析したい。

このような高齢化率が高い小規模集落において、時には外出を伴う社会的な交流は、緊急時における対応にも期待できる可能性があることは既に指摘されているところでもある³⁾。

本調査は石狩市浜益支所、経済企画部と藤女子大学 QOL 研究所が 2016 年 9 月 6 日～8 日にかけて共同で実施した。

調査対象は、浜益区内に点在する集落のうち居住世帯が 10 世帯以下の小規模集落とした。

調査実施時点で該当したのは A 集落 (5 世帯)、B 集落 (3 世帯)、C 集落 (3 世帯)、D 集落 (6 世帯)、E 集落 (9 世帯)、F 集落 (7 世帯) の計 6 集落 35 世帯である。

訪問調査にあたっては、あらかじめ各自治会と世帯に対し石狩市浜益支所から調査の趣旨を伝えて協力を依頼した。また、インタビューや応答について地区固有の名称や慣習、言葉遣いの理解に行き違いが生じないよう浜益支所を中心に石狩市役所職員が同行することとした。不在世帯もあり、在宅の 30 世帯を訪ねてインタビューが実施できた。

インタビューは、調査趣旨とインフォームドコンセントを口頭で確認したうえで、原則として、藤女子大学の学生および教員と石狩市市役所の職員がペアを組んで行った。また、了解を得てインタビューを録音し、記録漏れを補完した。

手法としては、半構造化インタビューを採用した。その項目は、①調査対象とその家族、②日常生活について：必需品の購入先・移動手段・衣食住生活で困難な事柄・学校教育・生活する際に頼りにする人・家への訪問者・交流する人・自治会の行事への参加、③日常生活や集落の魅力、④集落の将来、などに関してであった。

3. 石狩市浜益区の概要

石狩市浜益区の概要については、同市のホームページなどにも詳しく紹介されているので、ここでは本調査に関連のある情報のみ整理する⁴⁾。

第一に、浜益村から石狩市浜益区となった経緯である。平成 17 (2005) 年 9 月 30 日、厚田村とともに石狩市と合併をした。当時は、989 世帯 2,027 人であったが、現在 (平成 27 年) は 821 世帯 1,441 人まで減少している。最も世帯数と人口が多かったのは昭和 30 年で、1,441 世帯 9,082 人であった。ただし、昭和 29 年からニシン漁の不振が始まっており、このデータの元となる国勢調査は 5 年に一度の実施のため、昭和 26 年から 29 年の間に世帯数・人口のピークがあったこ

表1 石狩市浜益区の集落別世帯数、人口、高齢者数（比較）

H27.10.1	世帯数	人口計	高齢者人口	高齢者率	H17.10.1	世帯数	人口計	高齢者人口	高齢者率
浜益区計	822	1,462	775	53.0	浜益区計	1,006	2,104	893	42.4
浜益	163	282	140	49.6	浜益	201	408	138	33.8
群別	94	159	86	54.1	群別	118	234	106	45.3
幌	108	172	114	66.3	幌	145	266	146	54.9
床丹	7	7	7	100.0	床丹	10	10	8	80.0
千代志別	6	9	7	77.8	千代志別	9	13	12	92.3
雄冬	5	5	3	60.0	雄冬	4	7	6	85.7
川下	175	311	171	55.0	川下	184	417	162	38.8
柏木	126	250	102	40.8	柏木	155	364	113	31.0
実田	68	125	60	48.0	実田	74	165	81	49.1
御料地	4	11	6	54.5	御料地	5	17	7	41.2
毘砂別	49	96	57	59.4	毘砂別	67	134	78	58.2
送毛	8	16	10	62.5	送毛	12	27	18	66.7
濃昼	9	19	12	63.2	濃昼	22	42	18	42.9

（資料：石狩市人口・人口構造統計※外国人含まず）

とは容易に推測できる。

第二に浜益区における高齢者率に関してである。浜益区全体では、高齢者率は53.0%となっている。しかし、集落別にその割合を見ると、床丹の100.0%から柏木の31.0%まで差がある（表1）。傾向として、世帯数・人口数ともに少ない集落の高齢者率は6割以上となっている。

第三に産業形態である。人口動態について述べた際には、漁業についてのみ言及した。確かに、ニシン漁の盛衰に影響されたイメージが浜益にはある。しかし、内陸部には水稻を中心として肉用牛、果樹、野菜などを生産する幅広い農業が営まれている。とはいえ、平成12年段階でも、第三次産業44%、第二次産業34%、第一次産業23%であった。

4. 調査の結果

前述のように、予定した35世帯のうち外出不在の世帯を除く30世帯でインタビューすることができた。このインタビュー結果について、調査終了後に30世帯の聴取内容を整理し、1)世帯の状況、2)日常生活の状況、3)家族の状況と交流、4)近隣の状況と交流、5)他の交流、6)今後の生活・集落とのつながり、7)行事・懐かしい事、集落への愛着、などに分類して“生活振り”の全体像を捉えることにした。

なお、詳細な調査結果の記述は個人情報守秘に反するおそれがあるため、以下に提示する各表では、象徴的な言葉を切り取って示したり、内容の説明に足る共通表現に置き換えて一覧にしている。また世帯

No. はランダムに付けているが各表共通である。

(1) 世帯の状況（表2）

家族構成は、16世帯（53.3%）が単身世帯で最多であり、次いで10世帯（33.3%）が夫婦、その他、夫婦と子2世帯（6.7%）、片親と子夫婦1世帯（3.3%）、片親と子1世帯（3.3%）である。実年齢で世帯分類する27世帯（90.0%）が高齢者世帯であった。

単身高齢世帯は15世帯（50.0%）、うち女性は12世帯、男性3世帯である。高齢夫婦世帯は10世帯（33.3%）であり、両者を合わせた「高齢の単身または夫婦世帯」は25世帯（75.8%）に達する。

(2) 日常生活の状況（表2）

1) 屋内外の移動能力

デイサービスやリハビリ、訪問介護の利用者はいるものの、インタビューした全員が屋内のADLは自立していた。聴取の範囲では自身の摂食、排泄、入浴、着替えや整容動作といった身辺動作は多くの世帯で支障がないか、何とかできている。

しかし、外出歩行となると、腰痛や膝痛などで家廻りがやっとではほぼ屋内生活の状態が3世帯（10.0%）、かろうじて近隣へ外出はするものの歩行に不安がある状態が3世帯（10.0%）でみられた。かたや、生活の中での移動が自立しているのは23世帯（76.6%）、そして車を保有し外出や買い物等に利用しているのは13世帯（43.3%）であった。

配偶者が在宅介護をしている1世帯を除くと、起居

表 2 調査対象世帯の状況と日常生活の概要

世帯 No	世帯の状況				日常生活の状況				
	世帯人員	家族構成	高齢者の年代	性別	屋内外の移動能力	ふだんの過ごし方	食料等の買物方法	通院頻度 通院方法	特記 その他
1	1	単身	80代	女	歩行不安 バス利用	野菜作り	移動販売	月1町バス	週1デイサービス、ヘルパー
2	1	単身	80代	女	ほぼ屋内	テレビ	配達 近隣が注文	月2甥の車	旧知の近隣が代わりに電話 金銭請求を取次いでくれる
3	1	単身	80代	女	ほぼ屋内	家事	子が持参	月1子の車	冬場は札幌の子宅 毎週子が来ておかず作置き
4	1	単身	80代	女	自立 バス利用	野菜作り	移動販売	月1バス	山菜や魚介等をよく貰う 調理して近隣へ配る
5	1	単身	60代	男	自立 バス利用	スポーツ 読書、家事	移動販売	3ヶ月1バス	札幌等へ行き知り合いと会う
6	1	単身	60代	女	自立 車を所有	山菜取 漁の手伝い	車で買物		月1親の見舞いで札幌へ行く
7	2	夫婦	70代 70代	男女	自立 車を所有	釣り、山菜採り 分担して家事	移動販売	月1受診 定期入院	妻は週1デイサービス 夫は魚釣り、夫婦で助合う
8	1	単身	60代	女	自立 友人の車	漁の手伝い 畑仕事	移動販売 兄弟が持参		漁の手伝いは送迎付き 買物は友人の車に乗る
9	2	夫婦	80代 80代	男女	自立 バス利用	小物作り 野菜作り	移動販売 子が持参	年2子の車 月1町バス	日常生活に不便はない
10	1	単身	70代	女	ほぼ屋内	野菜作り	移動販売	月1バス	子宅に行き買物 雪かきで転倒骨折歴あり
11	1	単身	80代	女	自立	野菜作り 海藻採り	移動販売 子が持参	週1バス	調理して来訪する子に渡す 子から電話あり買物依頼
12	1	単身	70代	女	自立	野菜作り	移動販売	月1バス	消防団が来て雪かき
13	1	単身	80代	女	歩行不安	野菜作り テレビ	移動販売	月1町バス	服は親戚に頼む
14	2	夫婦	70代 70代	男女	自立 車を所有	農業 庭いじり	車で買物	月1車	年に1~2回旅行 いつまで運転か不安
15	2	夫婦	70代 70代	男女	自立 車を所有	農業	移動販売 車で買物	年2回1車	通院ついでに買物
16	2	夫婦	50代 40代	男女	自立 車を所有	農業	移動販売 車で買物		家畜がいて遠出はできない
17	2	夫婦	80代 80代	男女	自立 バス利用	野菜作り	バスで買物	月1町バス	移動販売がなくなり不便 冬は除雪ボランティアを依頼
18	2	夫婦	80代 80代	男女	自立 車を所有	散歩 新聞	車で買物 子が持参	月1車	親の代に植林した山を手入れ
19	2	夫婦 子	60代 30代	男女 男	自立 車を所有	漁業	移動販売 車で買物	月1車	よく札幌に行く
20	1	単身	70代	男	自立 車を所有	漁を手伝い	車で買物		移動販売がなくなり不便 よく札幌の兄弟の所へ行く
21	2	夫婦	80代 70代	男女	自立 車を所有	集落の世話役 畑仕事、テレビ	車で買物 子が持参	月1車	2~3月に1度札幌
22	2	親子	80代 50代	女 男	歩行不安 車を所有	新聞、テレビ	車で買物 子が持参	週2町バス	顔見知りとのりハビリ楽しい 子は隣接区で仕事
23	3	夫婦 子	50代 20代	男女 女	自立 車を所有	漁業 新聞、テレビ	移動販売 車で買物	月1車	娯楽や趣味は札幌へ
24	1	単身	70代	女	自立	野菜作り	移動販売 子が持参		子が服を送ってくれる 隣接区へハイヤー
25	2	夫婦	70代 60代	男女	自立	野菜作り	移動販売	月2バス	夫が出先で買物してくれる
26	1	単身	80代	女	自立	漁の手伝い 野菜作り、新聞	移動販売 子が持参	2ヶ月1バス	網あげを手伝って魚を貰う 年1回地区の社会見学に参加
27	2	夫婦	70代 60代	男女	療養中 自立	夫を在宅介護 畑仕事、テレビ	移動販売	3ヶ月1 子の車	訪問リハビリを利用
28	3	親 夫婦	80代 50代	女 男女	自立 車を所有	夫は仕事 妻は浜でパート	移動販売 車で買物		月2札幌で買物、通販も利用 パート先で魚を貰う
29	1	単身	70代	女	自立 車を所有	畑仕事、花作り 漁の手伝い	車で買物	月1車	夫は施設入所で週1面会 週1札幌
30	1	単身	70代	男	自立	漁の手伝い テレビ、カラオケ	移動販売	月1 近所の車	たまに札幌でカラオケ

動作や歩行ができない世帯はなく、ほぼ屋内であっても何とか移動できて身辺動作が自立していることが集落で生活していく要件とみられる。

2) ふだんの過ごし方

自家消費のための野菜作りをしたり、家事、テレビなどが主な過ごし方であるのは18世帯(60.0%)であった。これに対し、農業や漁業または勤務しているのは6世帯(20.0%)であり、ちなみに、このインタビュー調査で今後の集落の行く末について尋ねた回答では、さらに世帯は減少していくものの、たいがいがこの6世帯は先々も存続していくと予想していた。

一方、漁獲の選別や片付けなどの漁の手伝いをしてるのは7世帯(23.3%)であった。体が動くうちは漁を手伝い、獲れた魚や魚介の配分を受けて食材にしている。収入につながるような仕事ではないとしても、野菜作りや漁の手伝いは、付帯する段取りや作業があり、人との付き合いにもつながることから、高齢者の生活を考えるうえで一定の位置づけをすべき行動と見なす必要がある。

加えて、訪問世帯のすべてにテレビがあってよく視聴されており、小規模集落といっても情報面の生活意識は保たれていることも生活の継続性をもたらす一因とみられる。

3) 食料等の買い物方法

移動販売の利用が20世帯(66.7%)、さらに移動販売がなくなって不便というケースも2世帯あり、計22世帯(73.3%)に及ぶことから、こうした小規模集落にとっては非常に重要な役割を果たしている。ただ、依存の度合いには幅がある。食材に限らず注文して物品を入手するための主要な手段になっている場合もあれば、補完的に利用している世帯もある。他方、車で買い物をするのは11世帯(36.7%)となっている。

これら以外に、9世帯(30.0%)では他出している子ども(まれに兄弟)が買い物をしたり、あるいは必要品を聞き合わせて持参することが恒常化している。頻度は毎週であったり、月1回程度とバラツキはあるものの、冷凍ストックして解凍使用することで食生活を持続させている。

4) 通院頻度・通院方法

24世帯(80.0%)で通院しており、月1回程度が多い。

注目すべきことは、12世帯(40.0%)がバスを利用していることである。公共のバスを利用している場合もあるが、ほとんどがデマンドバス(予約して利用す

るマイクロバス)である。車を所有したり、子どもが通院を手伝える場合の通院は比較的容易だが、平日の通院ではバスへのニーズが大きいと考えられる。

5) 日常生活の状況の特記・その他

インタビューでは、多様な日常生活が窺えた。山菜を調理して来訪する子どもに持たせたり、近隣に配布している、あるいは、頻繁に札幌へ出かけて買い物や娯楽を楽しんだり、定期的に遠出の旅行をするケースもあった。

また、冬場は集落を離れて札幌の子ども宅で過ごす場合もあったが、かたや、そうした誘いがあっても断っている世帯も少なからず聞かれた。インタビューでは概して冬期の雪かきの大変さを話されることが多く、除雪を頼んだり、逆に隣家を除雪しているという世帯もあった。

(3) 家族の状況と交流(表3)

子どもがいないのは5世帯(16.7%)であり、このうちの4世帯(13.3%)は単身独居である。けれども後述のように兄弟とのつながりは保たれている。おそらく、兄弟も同じ集落で生まれ育っており、つながりは深いとみられる。

子どもがいるのは25世帯(83.3%)であるが、24世帯(80.0%)は札幌に子どもがいる。札幌と石狩市浜益区は車で1時間半~2時間の距離であることから、必要時には往来できる。実際、札幌にいる子どもが月1回以上来訪するか、札幌へ行くケースは11世帯(36.7%)である。

子ども以外に、兄弟(姉妹を含む)が来訪または訪ねるのは11世帯(36.7%)である。子どもか兄弟との往来を合わせると18世帯(60.0%)は形のある交流となっている。さらに、お盆の帰省など年1回以上へ交流の頻度を上げると24世帯(80.0%)は子どもや兄弟との行き来が続いているとみられる。

(4) 近隣の状況と交流(表3)

集落内の世帯間では、お互いに子ども頃の様子から現在の状況まで熟知していることがインタビューで窺えた。しかし、ふだんの交流には濃淡があり、毎日行き来する近隣もあれば、回覧を廻す程度にとどまっている世帯もある。懇意だった近隣が転出し、寂しくなっていることを話す世帯もあった。

インタビューにおいて、日頃から往来がある、おかげで野菜のやり取りがある、毎日のように訪ねて話す、あるいは来訪してくれるなどの言及があったのは、17世帯(56.7%)であった。

表 3 調査対象世帯の家族と地域の交流状況

世帯 No	家族の状況と交流			近隣の状況と交流		他の交流	
	子の人数	他出子の住所	交流状況 (主に子ども)	特記・その他 (主に兄弟)	近隣との往来		その他
1	3	札幌道外	毎日電話が来る 月1来訪		野菜を配る 仲良い近隣が来訪		
2	0			近い集落の兄弟・甥が頻繁に来訪	旧知の近隣が見守り		
3	5	札幌道外	毎週末来訪宿泊 食事作り庭手入れ	12～4月は札幌の子宅		畑で立ち話	年1敬老会
4	3	札幌	子と同居誘われる まだ同居したくない	12～1月は札幌の子宅	おかずのやり取り 仲良い近隣と話す		集金員等とよく話す
5	0			兄弟が年2回来訪		集落行事に参加	知り合いと集まる
6	0		お盆に兄弟集まる	同居してた親が入院後に施設入所	魚を配る 雪かき頼まれる		
7	0			兄弟は多い 集まる頻度は減	集落の世話役		
8	0		兄弟が月1来訪	兄弟家族と親密 兄弟と旅行	おかずのやり取り 用事を頼まれて手伝う		友人が頻繁に来訪
9	3	札幌道内	連休等に来訪 お盆に親戚集まる	親戚の戴物多い 近い集落に兄弟	おかずのやり取り 遊びに行き来		
10	1	札幌	夫は施設入所 迎の車で子宅へ行く	夫は入所施設		弱って付き合いができてない	移動販売員とよく話す
11	2	札幌道外	子や孫が月1来訪	近い集落に兄弟 親戚の電話多い	おかずのやり取り 遊びに行き来		配達員とよく話す
12	2	札幌	月1来訪	近い集落に兄弟	おかずのやり取り 遊びに行き来		
13	1	札幌	子が金銭管理 子宅へよく電話する	近い集落に親戚 親戚がよく来る		行き来あった人が転居	月命日にお経
14	4	札幌道外	盆と正月に帰省	親戚の往来多い	野菜のやり取り	寄り合いに参加	来た旅行者と話す
15	2	同居札幌	子も家業	兄弟の往来多い		自治会館に集まる	
16	3	札幌道内	忙しく頻繁ではない 時々帰省してくる		野菜のやり取り	集落行事に参加	友人が遊びに来る
17	2	札幌	連絡はよくある		車の便宜を図ってくれる		
18	3	石狩札幌	頻繁に来訪			高齢で弱る人が増えている	
19	2	札幌道外	子も漁業 孫が近くの集落			魚を近所に配る	子関係の友人が多い
20	2	札幌道内	子宅に魚配る	札幌に兄弟多い 同じ集落に兄弟	魚や野菜のやり取り	近所の雪かきをする	知り合いが多い
21	3	札幌	子が頻繁に来訪	札幌に兄弟多い 兄弟に山菜配る	集落の世話役 野菜のやり取り		月命日にお経
22	4	石狩札幌	同居子は仕事と家事	時々兄弟と電話	訪ねて話す		
23	2	札幌	同居子は仕事 週末に行き来		集落の世話役 魚や野菜のやり取り		
24	3	札幌道内	子が2ヶ月1来訪 電話を掛け合う	子が生活費支払		立ち話をする	知り合いから声かけ多い
25	3	札幌	子がお盆に来訪			立ち話をする	
26	4	同集落札幌	子と頻繁に往来			立ち話をする	月命日にお経
27	3	札幌道内	夫の通院を手伝う	夫の兄弟が多い		会えば長話	
28	2	札幌道内	子一人は学生		年齢差あるが話しやすくよく話す		
29	2	札幌道内	子は年1～2回帰省 子宅を週1訪問	年1兄弟で旅行		会うと話すが頻度が少ない	友人とよく旅行
30	1	道内	年1来訪			回覧を廻す程度	

表4 調査対象世帯の今後の生活や地域への愛着

世帯No	今後の生活	集落とのつながり	行事・懐かしい事、集落への愛着
1	死ぬ迄ここがいい	近い集落から嫁入り	次々と花が咲く
2	このまま暮らす	現家で生まれ育つ	小学校時代のお祭り、母早世し家事で明け暮れた
3	動けなくなれば施設へ	この集落から嫁入り	花火大会、運動会、今も月1集落の宮参りをする
4	ここに住むしかない	この集落から嫁入り	子育て等で忙しかった、今が一番いい
5	今のままここで暮らす	一旦他出後戻り親と同居	マイペースで暮らせる、近隣の干渉がない
6	施設入所した親の経過次第	一旦他出後戻り親と同居	生まれ育ち自然がいい、魚や食物がおいしい
7	町には行きたくない	一旦他出後戻り親と同居	浜も山も自然がいい、数人で月1集落の宮参りをする
8	仏壇があり離れられない	一旦他出後戻り家族の世話	生まれ育ち暮らしが安心、近所付き合いが濃い
9	先々困るけど今はいい	(亡夫の生まれ育った集落)	魚新鮮、嫁いで来て暮らしやすい、
10	ほかに行き場所がない	(亡夫の生まれ育った集落)	いいところはない、嫁いできて今が一番いい
11	自由だし、仏壇もある	近い集落から嫁入り	浜がいい、舅から大事にされた
12	自由なここがいい	近い集落から嫁入り	浜も山も自然がいい、魚や食物がおいしい
13	ゆっくりのんびり暮らす	(亡夫の生まれ育った集落)	住んでる所が一番、道内から嫁ぎ夫が優しくかった
14	やれる限り続けたい	3代続き誇らしい	秋の景色、若い頃の青年会活動
15	引き継いだので続ける	生まれ育って後を継いだ	いいところはない、春の農業準備が楽しい
16	今のところ問題ない	ここで生まれ育つ	秋の紅葉やキノコ採り、人を気にせず農業ができる
17	どこにも行く気はない	夫婦ともに生まれ育つ	山菜が採れて空気がいい
18	車が使えなくなるまでここ	夫婦ともに生まれ育つ	店と漁をして暮らせた、気を遣わずに暮らせる
19	漁ができるうちは住む	一旦仕事で他出後戻る	海川山の自然がいい、今を楽しめればいい
20	ずっとここにいる	一旦仕事で他出後戻る	気楽に暮らせる、近い集落の温泉が楽しい
21	動けるうちはここにいる	一旦仕事で他出後戻る	秋のキノコ採り、祭りや行事が楽しかった
22	元気に動けるうちはいい	(亡夫の生まれ育った集落)	道内から嫁入り、みんな仲良くしてくれる
23	生まれ育って離れられない	一旦仕事で他出後戻る	婦人部はよく集まっていた、何とか暮らしてきている
24	倒れるまでここがいい	近い集落から嫁入り	キノコ採りが楽しみ、よく働いて子を育てた
25	よそへ行く気はない	夫はここで生まれ育つ	山菜採りが楽しみ、ここの生活が楽しい
26	このままでいい	(亡夫の生まれ育った集落)	道内から嫁入り、漁の手伝いが面白かった
27	動けなくなれば施設へ	近い集落から嫁入り	秋の景色がきれい、勤めて働きづめ
28	今のところこのまま	一旦仕事で他出後戻る	こじんまりして住みいい、人が多く賑やかだった
29	元気なうちは住む	近い集落から嫁入り	野菜の収穫が楽しい、子育てでよく働いた
30	分からなくなるまで住む	この家で生まれ育つ	秋に魚がたくさん獲れる、わき水がおいしい

(5) 他の交流 (表3)

子どもや家族、兄弟親戚、近隣のほか、友人や知人との行き来や親密な関係を話されたケースは7世帯(23.3%)であった。集落に来る集金員や販売員と話す、あるいはお寺から毎月お経をあげに来るケースもあった。

(6) 今後の生活・集落とのつながり (表4)

今後の生活をどうするかについては、全世帯(100.0%)が集落での生活の継続を望んでいた。「他に行き場所がない」「ここに住むしかない」という表現と、「町には行きたくない」「よそには行く気がない」などはニュアンスが異なる。また、「動けなくなれば

施設」「車が使えなくなるまでここ」などのように、自身の生活能力との関係を念頭においた表現もみられている。

集落とのつながりについては、生家であったり、後を継ぐ、仕事や子育ての場、気候・風土など、多様な事情が考えられるが、インタビューの応答の外形から3類型に分けることができた。

女性では嫁いで来て親と同居したり子育ての地であったのが13世帯(43.3%)であった。このうち8世帯(26.7%)は浜益区の近い集落から、あるいは同じ集落内で嫁いでいた。集落で生まれ育って、そのまま住み続けているのは8世帯(26.7%)である。このほか、生まれ育ったのち一旦仕事で転出(就職や仕事の

都合など)したが、後を継いだり親の面倒をみるなどのために戻ってきたケースが9世帯(30.0%)である。大きくまとめると、インタビュー対象者はここで生まれ育った17世帯(56.7%)か、この集落へ嫁いで来た13世帯(43.3%)であった。

(7) 行事・懐かしい事、集落への愛着(表4)

海や山の景色や自然がいい、山菜やキノコ採りが楽しい、魚や食物がおいしいなどの集落の住みよさが多く挙げられている。賑やかだった頃のお祭りや行事への懐かしさも少なからず話された。

総じて、食べ物が美味しかったり山菜採りなども含めて、今の生活に良さや楽しみがあること、あるいは満足しているという趣旨を24世帯(80.0%)が言及していた。

5. おわりに

この調査で捉えようとした小規模集落における“生活振り”は、ほとんどの世帯で今の生活に楽しみがあり、満足をしていることから、限界集落という言葉から想起されるような悲観的なものではない実態が把握された。周辺の店がなくなり、交通手段であったバスが減便されても、魚や野菜の自家消費と移動販売で食材を入手していることから、「小規模集落実態調査報告書」(平成21年)における「困っていることは特にはない」という内実も垣間見ることができた。

以下、この調査のまとめとして、1)日常生活における「交流」、2)地域に対する愛着、3)小規模集落で生活する要件、4)集落の生活の回顧、5)今後の生活の継続に向けて、に関わる調査結果を概括して考察する。

(1) 日常生活における「交流」

表3に示すように、子どもは他出しているも、8割は1~2時間で行き来が可能な札幌に居住している。4割近くが月に1度以上の頻度で行き来がある。そうした具体的な往来はなくても連絡は頻繁にあり、年1回は帰省があり、実のところ、子どもがいない世帯を除けば、ほぼ全世帯で子どもとの緊密なつながりが保たれていることが推測される。また、4割近くは、近い集落に兄弟(姉妹を含む)がいて親戚付き合いが行われている。

かたや、近隣との付き合いは世帯数が少ないからといっても交流には濃淡が認められる。会えば挨拶をするし、お互いに生活状況は熟知しているとしても、日常的に家に上がって話したり、おかずのやり取りを

するような交流は6割弱である。他方、友人・知人と交流が頻繁なのは2割強である。

友人・知人に用事を頼めるケースはあるものの、子どもの場合、買物をして持参したり、金銭管理を手伝い、あるいは車で通院の便宜を図るなど、形態は多様であるがきめ細かくて継続性がある頼りになる「交流」となっている。

他出している家族や親戚は、すぐれて私的なソーシャルサポートネットワークであるが、実態が備わり継続性のある状況が把握されたことから、今後の地域を考える手がかりとして織り込んでいくべきことが示唆された。

(2) 地域に対する愛着

アンケート調査の対象者は結果的には、その集落で生まれ育ったか(6割弱)、または嫁いできたか(4割強)の何れかの世帯であった。出自に由来する愛着と同時に、家を継ぐ意識(3割は仕事等で他出したのち家を継いだり親の面倒をみるために戻っている)の強さも影響していると考えられる。

他方、近所付き合いが濃い、みんな仲良くしてくれるなどが話されたケースもあるが、ほとんどは、海や山の自然、魚や食べ物がおいしい、今の生活に良さや楽しみがあることを挙げている。

こうした、景色や自然がいい、山菜やキノコ採りが楽しい、魚がおいしい、漁の手伝いが面白かったなどは、小規模集落を含むこの地域に共通して今後も廃ることのない魅力であり、地域の資源として認識し、活かしていく多面的な検討も必要であろう。

(3) 小規模集落で生活する要件

集落の思い出や懐かしさとして、賑やかだったお祭りや行事、みんなが集まった集落の自治会活動なども挙げられている。かつて集落に分校があり、子どもの数が多かったことも語られたが、その時代から数十年を経て、たくさんの人たちが集落から転出している。

昭和29年からのニシン漁の不振により、余剰人口の他産業への移行が進んだことが過疎化現象の大きな要因として挙げられているが、ほかに、高齢者が病気になったり、要介護状態に至って入院・施設入所したケースも少なくないと考えられる⁴⁾。

この観点から現在小規模集落で生活する方々を見ると、2割が仕事を持っており、近隣から今後も存続して居住するとみられているのは比較的若い年代の世帯である。

かたや、仕事をもたない8割は高齢の世帯が多く、自立しているか、または起居動作と歩行ができて、屋

内や家廻りを何とか移動できることが要件と考えられた。そして、コミュニケーションが可能で、理解力や判断力に支障がないことも重要とみられる。

加えて、この調査では、7割が移動販売を利用してることがわかった。買い物については、4割が車を保有して買い物をし、また、3割は他出している子どもが車で届けて、時には冷凍ストックして食生活を継続させていた。つまり、車を所有しているか、子ども（一部は兄弟など）が食材等を届ける、または移動販売が生活を支えていることになる。

また、8割が通院し、その多くは月1回程度であった。その4割はデマンドバスなどを利用しており、通院の交通手段は、車かデマンドバスが半々であった。

(4) 集落の生活の回顧

懐かしいお祭りや行事への想いは、生活意識にも様々に影響すると考えられる。インタビューに際しては、子ども時代の通学がたいへんで、沿岸の道路が開通していない頃は、浜の背後の山道を使ったり、父親の漁船で送られた場面が生き生きと語られた。また、石狩川に橋が架かり、バスが開通した日には住民総出で旗を振って出迎えたことや、お祭りがいかに賑やかだったかなど、たくさんのエピソードを聞きとることができた。

こうした懐かしい出来事や思い出は、現在、集落で生活している人々だけのものではなく、今は集落を離れている多くの人々にも共有されている筈である。こうした故郷の記憶や思い出をもつ人たちがたくさん存在していることを、地域の資産として位置づけていく視点も必要と考えられる。

(5) 今後の生活の継続に向けて

小規模集落ごとに「自治会管理水道施設」があって生活用水の確保がなされており、インタビューでは、このほかにテレビ視聴のための共同アンテナ設備、街灯の維持管理などの苦労話を聞くことができた。また、「小規模集落生活実態調査報告書」（平成21年）では、葬儀方法、自治会の維持、集落の会館の維持や雪おろし、バス路線の確保などの問題点や実状について聞き取り調査結果が集約掲載されており、その中には、自治会の統合のことにも言及がある。

ゴミ収集や冬場の除雪なども含めたこれらの生活インフラは、各小規模集落に生活がある限り確保していく必要があり、その方法や担いかたについては柔軟な方策の検討が求められる。

他方、今回の聴取調査では、在宅で配偶者の療養介護をしているケースが1世帯、そして、親や配偶者が

入院または施設入所しているケースが3世帯でみられた。また、動けなくなれば施設を考えるという話も聞かれ、前述のように8割が通院している実態が認められた。

まずは、ある意味で不安定ともいえる現況を維持することを考えなければならない。また、健康面の変化に対しては、社会資源に関わる情報提供や種々のサービス提供、あるいは、そのための相談体制や方針の確認が必要である。その一方で、今回垣間みた“生活振り”の実勢は、調査対象とした小規模集落での生活を継続する要件を内包しているとみられる。これらには担い手や方法が変更されても継続できるものがあり、環境を変えたり、改善することによって状況を変化させていける変数として認識する必要がある⁵⁾。

6. 謝辞

調査のお願いに対して快くご協力を頂いた浜益区のみなさまに心よりお礼を申し上げます。また、共同で調査を企画実施した石狩市企画経済部企画課と浜益支所地域振興課のみなさまに深謝いたします。さらに調査員として参加した藤女子大学大学院生の沼田美由紀氏、神保光希氏、安田智世氏、ならびに学生のみなさまに深くお礼申し上げます。

【付記】

本研究は、2016年度藤女子大学QOL研究所研究助成により実施した。また、調査は「石狩市と藤女子大学との連携に関する包括協定書」に基づく「藤女子大学と石狩市の連携による集落実態調査実施要領及び実施協定書」に拠る藤女子大学と石狩市が共同で実施したものである。

引用文献

- 1) 石狩市浜益支所地域振興課『小規模集落生活実態調査報告書』平成21年
- 2) 石狩市浜益区『高齢者生活支援対策に関する要望調査報告書』平成24年
- 3) 古川恵子・本間俊雄「高齢過疎地域における人々のつながりに関する研究(3) —大隅半島A地域の実態」『南九州地域科学研究所所報』(第33号)、鹿児島女子短期大学、2017年、pp73-78
- 4) 石狩市浜益支所『石狩市浜益区概要(集落状況調査資料)』平成28年
- 5) 林恭裕・大内高雄・橋本伸也・林芳治・忍博次「過疎地域における地域包括ケアの実態と課題」北海道の福祉、北海道社会福祉協議会、2012年、pp25-99

Social investigation in the Ishikari-shi Hamamasu ward small scale village

— Knowledge obtained from the household interview investigation —

Nobuya HASHIMOTO

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Science, Department of Human Life Studies)

Yoshihito II

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Science, Department of Human Life Studies)

Tomoko KISHI

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Food Science and Human Nutrition)

Kunihiko KONNO

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences, Department of Early Childhood Care and Education)